『栄花物語』巻五「浦々の別」の位相

竹村志津子

はじめに

巻五「浦々の別」は、『源氏物語』から多くのものを摂取して、場面形成や人物造型が行われている、『栄花物語』の中でも特異な巻である。中関白家の御曹子伊周が光源氏になぞらえられ、この巻の主人公は中関白家の人々になっていて、前後の巻に続かず、独立性の強い巻と見なされてきた(1)。この稿では、ともすれば特異な巻というレッテルを貼って済まされてきた巻五について、源氏物語を模倣する際に、それを支えるにふさわしい表現がなされていることに注目し、さらに源氏物語利用によって生成する『栄花物語』の物語論理について、考察するものである。

一、召還の理由は皇子誕生
―巻五における中関白家の格上げ―

巻五「浦々の別」と『源氏物語』の関係については、既に多くの先行研究があり、『源氏物語』側からも取り上げられてきた。古注以来の準拠説によってである。例えば阿部秋生氏は、『源氏物語研究序説』で、須磨・明石の光源氏の準拠として、小野篁・在原行平・菅原道真・源高明・藤原伊周の名をあげ、これらの中で、「(源氏物語には)伊周の名は勿論のこと、伊周に関係のある辞句を全然用ゐてはゐないが、最もよく似てゐるのは何といつてもこの伊周の場合であるといはねばなるまい」(2)と説明される。山中裕氏になると、紫式部が道長の娘彰子に宮仕えしたときは、政敵中関白家の伊周が政界から失脚させられてまもない頃(事件後五、六年)であり、この伊周事件を準拠として、現在執筆中の物語に挿入することは当然あったであろう(3)と、より積極的に伊周事件の準拠を支持している。

阿部氏や山中氏は、また、須磨の巻をよんだ当時の読者は、この伊周の姿を思い浮かべたはずである、とも述べられたが、確かに、『源氏物語』執筆まもない頃の第一次享受者であった『栄花物語』

の作者も、須磨・明石の巻が伊周配流事件を生かしている点を見すえた上で、逆に巻五の伊周・隆家の配流事件を書き綴ったことであろう。

「浦々の別」の巻の伊周・隆家配流に関する記事の内容について、山中裕氏は、源氏物語の影響があると考えられそうな部分を、他の記録類と比較対照させながら、(1)伊周隆家配流の原因 (2)伊周隆家配流の過程 (3)伊周隆家召還の原因及びその過程 と三つに分けられた。私も、この(3)に注目したいのだが、氏は、明石の巻の「皇子御誕生が動機に朱雀帝は春宮に譲位を思いつき、それには是非光源氏を許し召還すべきだと思われ、弘徽殿の反対も押し切って遂にそのことを実行された」という箇所を押さえて、「浦々の別」の伊周・隆家の召還も、「一条天皇と定子との間に敦康親王が御誕生せられたのを動機に東三条院・一条帝・道長の合議の上で召還されるのである」と、両作品が一致する点を指摘された。史実は、東三条院詮子の御悩による大赦のための召還であったのだが、栄花物語のみが、「召還の原因を皇子誕生とした」と述べられた。そして「源語を模倣したため、栄花の著者が長徳三年の事件である伊周隆家召還の原因をその原因である東三条院の御悩とせず、わざわざ源語に模して皇子誕生に結びつけたため、長保元年の事件を挿入するという無理な編纂状態を呈してしまった」と、編集の混乱に言及している(4)。

『栄花物語』では、こうして光源氏の流離譚と召還の契機を、伊周・隆家の配流事件と召還の契機に重ね合わせて描いているわけだが、その際に、中関白家の人々を他の巻よりも格上げし、最高に位置づけている点に注意しておきたい。以下の節の前提として、紙幅の都合で簡単ながら、触れておきたい。それは、『源氏物語』を模倣するにふさわしい書き方といえるのだが、考えてみれば、ただ単に光源氏を模倣するだけですむはずはなく、理想的な主人公を描くためには、表現面で支えていくことが要請されるのは当然である。

第一には、中関白家に対する、人々の反応のしかたがある。巻四で、伊周に対してあれほど批判的であった世人も、巻五になると一変して同情的になる。伊周らを捕らえ護送する役目の検非違使も、伊周らに暖かく接し涙している。語り手が顔を出す草子地部分でも同様な表現が見られ、それらの描き方は作者自身が選択したものと言えるのではないだろうか。

それは、第二にあげたい呼称の面によりはっきり表れている。まず伊周についてみると、巻五においてその呼称は、「内大臣殿」「殿」「帥殿」と殿呼称が行われる。配流の宣旨が下った後も「内大臣殿」という呼称(5)が見えており、「帥」と呼ばれるのは天皇に奏上する時の三例のみである。単独の「殿」呼称を見ても、光源氏に似せた、木幡に詣でる場面に見えるだけでなく、伊周が密かに入京して母貴子や定子と対面する場面においても「殿」呼称がなされ(6)、ひいてはその伊周の行動に対して、「世の人、この殿の御有様を」と、世人がいろいろ噂する際にこの呼称が見える。「殿」として、物語の中心に据えて語り進める筆遣いがある。

隆家について見ると、その呼称は他の巻々同様、「中納言」「中納言殿」であり、

帥殿は筑紫の方なれば、未申の方におはします。中納言は出雲の方なれば、丹波の方の道よりとて、戌亥ざまにおはする、

（本文は新編日本古典文学全集による。巻五 二五〇頁）

というように、伊周が「帥殿」と呼ばれているのに対して、隆家は「権守」などとは決して呼ばれておらず、それはまるで、配流された人でないような描き方をしている。また、隆家が配所の但馬に到着した時の様子も、

かくて但馬におはし着きぬれば、国の守、公の御定めよりほかに、さし進み仕うまつること多かり。中納言殿は心愛敬づきたまへれば、誰もいみじうぞ仕うまつりける。（巻五 二五五頁）

と、隆家を好ましい人物として描いている。この他にも、隆家も中関白家の一人として、中心的な人物としての位置づけがなされている箇所は多い。

定子について見ると、さらに顕著なものがある。巻四での定子の呼称は「中宮」のみで四例であるが、これは后の位を示すものであり、第三者的なもの言いである。いわば外部にいる人物に対する表現といえようか。巻五になると、定子の呼称は「中宮」は二例のみで、「宮」「宮の御前」「御前」「御方」とあり、定子に密着した書き方となる。その中でも定子に対する「宮の御前」という十七例ある呼称は、巻五のみに用いられている。「宮の御前」「御前」の呼称は、定子をあたかも女房が自分の女主人を呼ぶかのような表現で、定子の間近にいて定子に密着した場面の作り方がなされているということができる(7)。巻五の物語において、定子がかけがえのない存在で、彼女が中心的な役割を果たすことを端的に示している。

木村由美子氏は「栄花物語の人物呼称」において、定子の母貴子について、巻五のみに「上」という呼称がある事実を指摘して、「地の文中の「上」は彼女の子供や彼女の子供や彼らに仕える者等中関白家圏に密着した呼称である」(8)と述べられているが、実は、このことは貴子についてだけでなく、定子・伊周・隆家などの中関白家の主だった人々に該当するのである。巻五の物語において、中関白家一家は中心的役割を果たすにふさわしい表現がなされているといってよい。

さて、『栄花物語』の物語展開という面から見ると、召還の契機となった、『源氏物語』を利用し、史実に相反する「皇子誕生」が、非常に重要であるように思われる。それを次節で検討したい。

二、皇子誕生の夢か、天子誕生の夢か

伊周・隆家の召還の契機となる「皇子誕生」には、それを予告する夢が記されている。祖父の高階成忠が孫の中宮定子に参内を勧める場面に見えるものである。

ア「たびたび夢に召し還されるべきやうに見たまへるに、かく今まで音なくはべるをなむ。なほさるべう思したちて内裏に参らせたまへ。御祈りをいみじう仕うまつりて、寝てはべりし夢にこそ、男宮生れたまはむと思ふ夢見てはべりしかば、このことによりて、なほ疾く参らせたまへと、そそのかし啓せさせむと思ひたまへられてなむ、多くは参りはべりつるなり。御文にては落ち散るやうもやと思ひたまへてなん」などそそのかし、泣きみ笑ひみ夜一夜御物語ありて、暁には帰りたまひぬ。（巻五 一七五頁）

ここで語られた夢は高階成忠が見たもので、伊周・隆家が召還されるはずという夢、そして男宮が生まれるという夢である。成忠はこの夢語りをして、定子に参内を強く勧めている。この勧めに従って、定子は女一宮を連れて内裏に参内した。そして夢のとおりに定子は

懐妊、敦康親王が生まれたと栄花では記している。この夢語りの場面は巻五において、定子を参内させるきっかけとなり、皇子誕生へと導く転機となる位置にある(9)。

ところで、アの場面の前には、

イ宮のいみじううつくしうおはしますを、二位笑みまげうつくしみたてまつりたまふ。「あはれに、上の御代りには、御前をこそ頼みまうしてさぶらふままに、明暮もえ見たてまつらぬことをなむ。さても、『内には、この宮をいとゆかしきものに思ひきこえさせたまへば、入らせたまふべし』など世には申すめるを、いかがは思し定めさせたまふらむ。老の身は、さべき人もものをなむ聞かせはべらざりける」と申したまへば、

（巻五　二七四頁）

とあるように、脩子内親王の可愛らしい様子を見る成忠を、「二位笑みまげうつくしみたてまつりたまふ」とし、そのまま定子に参内を勧める様子にも「申したまへば」と尊敬語が用いられている。そして成忠が夢語りをした後、退出する際にも「暁には帰りたまひぬ」と尊敬語が使われ、計三箇所にも及ぶ。尊敬語が夢語りの場面において用いられているのは注意したい。

というのも、巻四で、成忠は「二位」「二位の新発意」で地位は同じであるが、巻四では敬語は一切使用されていない。それどころか、成忠は、

ウ二位の新発意祈りたゆまず、いとどしう、さりともさりともと思ふべし。げにさもありぬべき御有様のためしをと思ふぞ、げに公腹だたれける。

（巻四　二一九頁）

と伊周の政敵を呪詛するとして、語り手から直接「げに公腹だたれける」と批判がなされているのである。

松村博司氏が「栄花物語・大鏡の敬語」で、成忠には敬語が使われていないことに注目して、本来敬語がつくべき元方とあわせて、「要するに二人とも同情をひくべきものを持ちながら、あえて同情し得ないいらだたしさがかえって反感をかったものと考えられる」(10)と述べられ、「作者の感情の発露と見られる」とされている。それではアイにおいてのみ、成忠に対して尊敬語が使われているのはなぜであろうか。これは、松村氏が同じく「栄花物語・大鏡の敬語」において、

ある箇所においてある人物を主人公格としてややまとまった物語風の記述を行なう場合にあっては、その人物やそれに関係のある人物を、他の箇所においてよりもいっそう丁重に待遇する傾向があるということも考えられる。

と述べられているものに該当すると思われる。つまり、アイにおいては、成忠を重要な役回りを持つ者として、重々しく位置づけているのである。成忠も、巻五においては他の巻よりも格上げがなされていた。

成忠の夢見は的中し、敦康親王が誕生し、伊周らは召還された。成忠は夢が正夢となったと喜び、さらに、

エ二位は夢をまさしく見なして、「かしらだにかたくおはしまさば、一天下の君にこそはおはしますめれ。よくよく心ことにかしづきたてまつらせたまへ」と、つねに啓せさす。

（巻五　二八四頁）

と、成忠は、「夢をまさしく見なして」、将来健康であれば、一天下の君（＝全ての人々の君）つまり天子になるに違いないと、常に定

子に啓上させたとある。成忠の夢は、アでは「男宮生まれたまはむと思ふ夢」であったのだが、エでは「一天下の君」になるべき皇子となり、将来の望みを託していくのである。成忠の夢が単なる男皇子誕生の夢なのか、天子となるべき皇子誕生の夢なのか、それは明示されていないのであるが、少なくともエで、「天子誕生」の夢として意味が付与されて、その後の展開へとつなげているとは言えよう。アイの敬語は成忠に対して、皇子誕生の夢を見、それがゆくゆく帝位に立つべきと望みをつなげたものとして、大切な人としての敬意も込められているのではないかと考えられる。

ここで、脇道にそれるが、平安文学に描かれた天子誕生に関わる夢の系譜について、整理してみよう。『源氏物語』では、天子たるべき皇子の誕生に関わる夢と、その夢を見届ける役目を担う者として、①若紫巻での光源氏の見た「おどろおどろしうさま異なる夢」と、②若菜上巻における明石入道の夢語りがあげられよう。①はよく言われるように、予言の役割を果たし、物語の展開を促し、光源氏の子、冷泉天皇が誕生した。②の明石入道の夢は、第二部に入ってから明かされる。

②わがおもと生まれたまはんとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下の蔭に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆく、となん見はべりし。　（全集『源氏物語』若菜上巻　一〇五頁）

明石入道は、娘の誕生した年に須弥山の左右から月日の光がさし出て世を照らす夢を見た。娘明石上が女子（明石女御）を産み、その女子が男皇子を産み、帝位につき、女子は国母（中宮）となる予兆の夢である。この夢語りによって明石一族の今までの栄華を希求する道が明らかになった。ここではじめて、光源氏らにも明石入道の今までの生き方が理解されるのであった。この夢は、若菜下巻において今上帝即位の折に、若宮が東宮に立つこと、及び御法巻で明石女御が中宮になっていることで果たされた。①②ともに光源氏の栄華を到来させた夢であった。

ところで、この『源氏物語』の明石入道の夢の準拠として、『河海抄』には聖徳太子の夢想(11)、『花鳥余情』には『過去現在因果経』が、それぞれ記されている。私はさらに次の二つの記事を付け加えたい。

・仁明天皇　―即位前紀―

天皇諱正良。先太上天皇之第二子也。母太皇大后。贈太政大臣正一位橘朝臣清友之女也。太后曾夢。自引圓座一　積累之一。其高不レ知レ極。毎二一加累一。且誦二言卅三天一。因誕二天皇一云。

（『續日本後紀』巻第一）

・後太上天皇　―即位前紀―

天皇。諱貞明。先太上天皇之第一子也。母皇太后。贈太政大臣正一位藤原朝臣長良之女也。后兄右大臣藤原朝臣基経。初夢。后露二臥庭中一。苦二腹脹満一。頃之腹潰。気昇屬レ天。即便成レ日。其後后以レ選入二掖庭一。遂有レ身焉。（『日本三代實録』巻第三十）

『續日本後紀』の夢は、仁明天皇即位前紀で、帝の母（橘嘉智子）が見た夢であり、自ら圓座を天高く積み重ねていき、三十三天を誦し、それゆえ天皇が誕生したとある。「三十三天」とは、中村元氏の『佛教大辞典』には、「六欲天の一つ。須弥山の頂上にある天。

中央に帝釈天がいて、頂の四方に各八人の天人がいるので、合わせて三十三天となる。忉利天ともいう」とあり、明石入道の夢にも出てくる「須弥山」の、頂上にある天のこととなる。例えば『三宝絵』で一万の魚たちが三十三天に生まれかわり、天子となっているように[12]、天子に関わる表現とみることができる。また、『日本三代實録』の陽成天皇即位前紀の夢は、藤原高子の兄基経が、高子について見た夢である。高子の腹中の気が天に昇り、「日」に化したという夢である。この夢は、高子入内前のことであるが、陽成天皇誕生を予言するものであろう。明石入道の夢と同じく、「日」が夢に出てくることが非常に興味深い点である。

国史の二つの夢は、共に皇子誕生についての夢、つまり国母となる女性が皇子を産むという暗示があり、結果的にそうなった夢である。国史として編まれた中に、天皇誕生、つまり国母となる夢告が記録されたことは、注目すべきであろう。当時の夢に対する信頼度がうかがえる記事である。『日本三代實録』の「皇子誕生」の夢を見たのが、国母の兄基経という肉親であり、かつ、権力構造の一翼を担う人物である点にも注目したい。

一条帝は紫式部を「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。」と言ったそうだが（『紫式部日記』）、紫式部は六国史を読んでいたらしい。だが、この『續日本後紀』と『日本三代實録』の夢については、主だった古注釈にも触れられず、そのせいか、現在の注釈書類に全く言及がない。

平安時代の作品の「夢」について、「見る」意の夢に限ると、以下のような数字になる。

『伊勢物語』（2例）、『大和物語』（1例）、『源氏物語』（23例）、『夜の寝覚』（3例）、『栄花物語』（23例）、『大鏡』（11例）、『蜻蛉日記』（10例）、『更級日記』（11例）

以上の見る「夢」は、その性格からいくつかに分類できるが[13]、その中で、「皇子誕生」あるいはそれに類する瑞兆の夢を記すものに、まず『蜻蛉日記』があげられる。下巻の天禄三年二月十七日の条である。夫婦仲が心細く思われる時であったが、一昨年に石山に詣でた時に依頼しておいた法師から、

「いぬる五日の夜の夢に、御袖に月と日とを受けたまひて、月をば足の下に踏み、日をば胸にあてて抱きたまふとなむ、見てはべる。これ夢解きに問はせたまへ」

（新編全集『蜻蛉日記』二七七頁）

と言いよこしてきたので、筆者は疑わしく思いながらも夢解に聞く。すると夢解は「いかなる人の見たるぞ」と驚き、「みかどをわがままに、おぼしきさまのまつりごとせむものぞ」と、夢を解く。これについて筆者は、夢を見たと言ってきた僧が疑わしいと思って、気にとめなかったと記す。この夢は、作者の袖に月と日の光を受け、月を足下に太陽を胸に抱くという夢で、明石入道の夢と同じく、「日」（天皇）と「月」（中宮）が出てきている。朝廷を思いのままにするとは、天皇や中宮を輩出することであろう。

上村悦子氏は「紫式部が蜻蛉日記を読み種々の点で有形無形に教えや影響を受けていることを私も指摘したい」[14]と述べられ、新編全集『蜻蛉日記』にも、「道綱の母がこの夢にかけたむなしい望みは、『源氏物語』の明石一族の物語における、虚構的実現につながる。」[15]と指摘があり、『源氏物語』の夢が『蜻蛉日記』からもなされていることは否定できない。

『大鏡』においても、注目する夢語りがある。

生まれおはしまさむとて、いとかしこき夢想見たまへしなり。さおぼえはべりしことは、故女院、この大宮など孕まれさせたまはむとて見えし、ただ同じさまなる夢にはべりしなり。それにて、よろづ推しはかられさせたまふ御有様なり。

（新全集『大鏡』三六六頁）

これは禎子内親王に対する世次の夢語りであり、詮子・彰子同様の夢ということで、天皇の母、女院たるべきことが予言されたものとなる。また、師輔伝では、師輔が「朱雀門の前に、左右の足を西東の大宮にさしやりて、北向きにて内裏を抱きて立てり」という吉夢[16]を見ており、大内裏をすっぽり抱くということで、一家からは天皇后が輩出する夢であり、これを師輔は、自分で人に話したことによって、彼自身は恩恵に浴さなかったが、これも天子に関わる瑞兆の意の夢とみなすことができるであろう[17]。こうしてみると、六国史という前時代や、紫式部とほぼ相前後する同時代に、天皇誕生に関わる夢見がなされたという共通基盤があったと言える。

「浦々の別」は、この基盤に立ち、成忠の夢と明石入道の夢を重ね合わせることで、成忠の夢を劇化し、天子誕生に関わらせて、信憑性を持たせたものと考られる。さらに、明石入道の夢によって明石一族の物語が成立しているのに対して、成忠の夢を中心とした、結果としては確立することのなかったもう一つの権力構図としての中関白家の物語を、巻五において成立させているのではないだろうか。「皇子誕生」の夢を描くことで、敦康親王が帝位に立つ可能性をこの後も提示し続けていくのである。

『栄花物語』において、成忠は実際よりも長く生きたことになっている。これは、成忠を、皇子が誕生するまで長生きさせて、その皇子敦康親王が将来帝位につくという夢を見た者として、見届けさせる人物として位置づけたものではないか。なぜなら『栄花物語』と『源氏物語』の、それぞれの「皇子誕生」の夢を見た成忠と明石入道は、自分の子孫の繁栄を夢に見、その夢告が成就しそうなところまで見届ける点が共通しているからである。それは、夢語りの役目を担う者としての共通点である。唯一の頼みである皇子誕生にかける七十余歳の成忠について、河北騰氏は「奇矯で狷介な、特異な性格の持主であった」と述べられているが[18]、むしろ作品の論理を根底で支えていく役割をもたされて、祈る姿は哀しくも滑稽ささえうかがわせているように感じられるのである。その成忠の夢を巻五の、すなわち中関白家の物語の中心におくことで、彰子の入内とそれに伴う道長のますますの栄華を描いている巻六「かがやく藤壺」という巻とは異なる、巻五独自の世界を創りあげているものと思われる。

三、巻五における夢語りの射程

敦康親王が帝位に立つ夢兆に関して、もう一つ記述がある。

オめづらかなる夢など見てし後は、さりともと頼もしう、異なることなき人の例の果て見てなどこそはいふなれば、さりともとのみ、そのままに精進、斎をしつつあり過ぐし、ひたみちに仏神を頼みたてまつりてこそありつれ、今はかうにこそあめれと、御心の中のもの嘆きに思されて、

（巻八　四二九頁）

とある。伊周は「めづらかなる夢」により、「果て見て」の世間の言い草があるようにいくらなんでもと、敦康親王に望みをかけて、

精進を続けてきた。が、道長の娘彰子に敦成親王が誕生して、その期待が無残に破れたと、伊周の嘆きが描かれている。この夢語りは、この巻八で初めて語られるのであるが、ここまでに、巻六では、

カ帥殿はそのままに一千日の御斎にて、法師恥づかしき御おこなひにて過ごさせたまふ。今は一の宮かくておはしますを、一天下の灯火と頼み思さるべし。げにことわりに見えさせたまふ。一の宮の御祈りを、えもいはず思しまどふべし。

（巻六　三〇七頁）

というように、敦康親王を「一天下」の「灯火」、つまり天子になるべき君として「一の宮」に望みをかけ、法師に劣らないくらいに精進している伊周が描かれ、巻七では、

キ帥殿そのままの御精進なれば、法師に劣らぬ御有様、おこなひなるに、ただ今はこのことをのみ申させたまふ。

（巻七　三二四頁）

と、「ただ今はこのことをのみ」と、敦康親王立太子を祈る様子がうかがえるのである。敦康に関わる二つの夢に託された望み、すなわち敦康の即位は実現しなかった。しかし、ここまで敦康親王の可能性にかける物語が幾重にも語られていることは、やはり注目すべきことであろう。

ところで、巻八において、伊周に巻四・巻五にあった「殿」という呼称が復活している。これは、巻八において伊周が、彰子に敦成・敦良二人の皇子が相次いで誕生したことにより、悲嘆にくれながら亡くなる物語中にある。作者が伊周一家の人々に焦点をあて、力をこめて描いていると考えることができる。伊周は、敦康親王に望みをかけているが、それは巻八の死の際まで続いていたのだった。伊周死後、敦康親王元服にあたって、次のように記されている。

ク今上の一の宮をば帥宮とぞ聞えける。御才深う、心深うおはしますにつけても、上はあはれに人知れぬ私物に思ひきこえさせたまて、よろづに、飽かずあはれなるわざかな、かうやは思ひしとのみぞ、うちまもりきこえさせたまへる。御心ざしのあるままにとて、一品にぞなしたてまつらせたまひける。よろづを次第のままに思しめしながら、はかばかしき御後見もなければ、その方にもむげに思し絶えはてぬるにつけても、かへすがへす、口惜しき御宿世にもありけるかなとのみぞ悲しう思しめしける。

（巻八　四六〇頁）

一条天皇は「よろづを次第のままに（兄弟順に）」と思いながらも、「かへすがへす、口惜しき御宿世にもありけるかな」と第一皇子である敦康親王を帝位につけられそうになく残念がっている。実際、巻九で一条天皇譲位にあたって立太子したのは、弟の敦成親王であり、敦康親王ではなかった。そして崩御の後に、

ケ帥宮は、まだいと若うおはしませど、おほかたのどやかに心恥づかしう、よろづ思し知りたる御有様なれば、いたう沈み思し嘆くさま、ことわりなりと見えたり。一方のみならず、おのづから思し結ぼほるることなきにしもあらじかしと、さまざま心苦しうなん。

（巻九　四七三頁）

と、一条天皇崩御に対する帥宮敦康親王の悲嘆にくれている様子を描き、二の宮に東宮の位を越えられたことに対して、傍線部のように、敦康親王を「思し結ぼほ」れているのではないか、と語り手が想像している。さらに巻十二の三条天皇が譲位して敦明親王が立太子した時には、

コもしこのたびもやなど思しけんこと、音なくてやませたまひぬ。東宮もことわりに世の人は申し思ひたれど、この宮には、あさましうことのほかにもありける身かなと、うち返しうち返しわが御身一つを怨みさせたまへど、かひなかりけり。

（巻十二　七〇頁）

敦康親王の立太子への期待がやぶれ、わが身のつたなさを「あさましうことのほかにもありける身かな」と、怨んでいる。そして三度目となるのが、巻十三で敦明親王が東宮の位を退いて、敦良親王が立太子した時であり、

サ式部卿宮、この方にはむげに思しめし絶えにしかど、このたびの隙にはかならず立ち出でさせたまふべかりつるを、御宿世をば知らせたまはずとも、なほあやしくとはいかでか思しめさざらん。世とともにはればれしからぬ御気色にも、心苦しうなむ。

（巻十三　一一一頁）

と式部卿宮敦康親王の思いが描かれている。語り手たちにとっては、自明である「御宿世」を知らずに、「世とともにはればれしからぬ御気色」である敦康親王に、同情的な思いを馳せている[19]。

以上のように敦康親王が帝位につくという望みは、一条天皇の「一の皇子」であるからというだけでなく、帝位にのぼるべき予兆である巻五の成忠の夢があったからこそであり、さらに、巻八において伊周の夢に寄せた期待が記されていたから、ここまで物語として織り込まれてきたのであろう。

巻十四で、敦康親王が薨じる際に、

シ「あさましう心憂かりける御宿世かな」と、よろづを数へつつ、いみじく恥づかしげにのみ世の人申し思へり。

（巻十四　一六一頁）

とある。ここでは世人が、「あさましう心憂かりける御宿世かな」と言っているように、敦康親王の物語は帝位につけない「宿世」として置き換えられ、結実している。

敦康親王の「宿世」としては、これ以前にも、巻八ではクにおいて一条帝に「口惜しき御宿世」として認識させ、巻十三ではサにおいて、「御宿世をば知らせたまはずとも」と語り手に述べさせている。巻十二で敦康親王が具平親王女と結婚する際にも、

ス式部卿宮も、同じき宮たちと聞えさすれど、御心も御かたちもいみじうきよらに、御才なども深くて、やむごとなうめでたうおはしませば、御宿世のわろくおはしましけるを、世に口惜しきことに申し思へり。

（巻十二　七二頁）

と、世間では宿運のつたなさを口惜しく言っている。

『栄花物語』において、一人物に対して「宿世」をふまえて述べているのが四回にも及ぶのは、敦康親王のみであり、しかも世人が宿世を噂しているのも敦康親王に対してのみである[20]。このことを考えてみても、夢によって具現化された天子となるべき敦康親王の物語は、それをモチーフとしながら、天子になれない宿世へとからめとられてこの薨去の時まで引きずっているのではないだろうか。

むすび

巻五「浦々の別」を、その特異性を支える表現、及び『源氏物語』からの影響によってなされた物語の論理について見てきた。『栄花物語』の作者は、単に『源氏物語』を模倣したのでなく、『源氏物語』が準拠として用いた背景を共有基盤として有しつつ、ある部分

を上手に用いて、巻五を歴史そのままよりも一層のふくらみをもたせて描くことができた。その中でも、明石入道の夢語りが恰好の材料となりえたのである。巻五において「男皇子誕生」を「天子誕生」と同価値とするような描き方は、実際には天子になれなかったという現実に対して、より一層、中関白家の位置がひときわ高く浮かび上がるように記した。巻五はこのように特徴ある様相を持ちながらも、『栄花物語』全体の中でも強力なアクセントを付与しているのではないだろうか。そして「男皇子誕生」イコール「天子誕生」とする成忠の夢は、敦康親王の「宿世」へとからめとられていくかたちで、後々の巻にまで射程とすることができた。

注

(1) 松村博司『栄花物語の研究』「第3篇内容の研究　第2章内容二」・「第2篇成立の研究　第五章正篇の典拠各節」(刀江書院　昭和31年12月)、河北騰『歴史物語論考』「第六章「浦々の別」巻について」(笠間書院　昭和61年3月)など。

(2) 『源氏物語研究序説』「第二篇明石君の物語の構造　第一章須磨・明石の源氏」(東京大学出版会　昭和34年4月)

(3) 『平安朝文学の史的研究』「第二章源氏物語の歴史意義　第三節源氏物語の時代」(吉川弘文館　昭和49年4月)

(4) 山中裕『歴史物語成立序説』「第二章源氏物語の歴史的意義　第五節栄花物語における源氏物語の影響」(東京大学出版会　昭和37年8月)

(5) 二四七頁の伊周が木幡・北野から帰邸する場面。

(6) これは中関白家内なので、当然のこととも言える。

(7) 「宮の御前」という呼称は『栄花物語』において妍子18例、定子17例、彰子7例(他の人物は1、2例のみ)あり、妍子の次に頻用されているが、定子の場合巻五のみに使用されていることが注意される。

(8) 木村由美子「栄花物語の人物呼称」(『古典和歌論叢』明治書院　昭和63年)

(9) 江口孝夫氏は『日本古典文学　夢についての研究』「第三章夢の特性　第一節夢の成因」の中で、この夢を扱われており、「願望のあらわれ」と位置づけられ、亡き者が現れる夢と同様とされている。しかしこの成忠の夢は、願望を含みながらも、物語を新たに構成していく原動力ともなっている。

(10) 「栄花物語・大鏡の敬語」(『敬語講座第二巻』明治書院　昭和48年)

(11) 『河海抄』(源氏物語古注釈大成第六巻　日本図書センター　昭和53年10月)に、「日月夢事」の最初に聖徳太子に関わる夢想について引いてある。また、これに続いて『栄花物語』の成忠の夢も引いてきており、「栄花物語に二位新発意皇后宮定子による忍て参て御物語きこゆる中御祈つかうまつりてねて侍し夢に男御子生給はんと思夢をみて侍しかは云々雖為吉夢兆其人不幸事」とある。

(12) 新日本古典文学大系『三宝絵』第七条

(13) これらの夢は、(a)夢告の性質をもつもの　(b)恋愛関係によるもの　(c)亡くなった

人が出てくるもの　の三つに分類でき、(a)についていうと、『源氏物語』12例、『夜の寝覚』2例、『栄花物語』12例、『大鏡』4例、『蜻蛉日記』8例、『更級日記』9例であり、(b)(c)に比べて圧倒的に(a)の夢告の性質をもつものが多く、各作品において一層のふくらみをもたせるために夢が用いられている。

(14) 「源氏物語と蜻蛉日記」(『源氏物語と女流日記研究と資料』武蔵野書院　昭和51年11月)

(15) 新編古典文学全集13『土佐日記・蜻蛉日記』(小学館　平成7年10月)二七七頁頭注。

(16) この夢は、「なまさかしき」女房が「いかに御股痛くおはしつらむ」と言ったので、吉夢が師輔本人には実現しなかった。

(17) 『栄花物語』続篇にもう一例瑞兆の夢がみえる。これは巻三十八における源基子が見たとされているもので、

もとより帝の御母になりたまふべき宿曜ものしたまふ。御夢にも、紫の雲立ちてなん見えたまひけるなど聞ゆるを、「なほさこそ人はものはいへ」と言ひしを、「まことにただ今にてはかなひぬべきにや」と、人々は思ひいふめり。　(四二五頁)

とあるように、天子の母となる夢を見たというものである。源基子の子、実仁親王は東宮に立った。帝位につけば、基子は「紫の雲」、つまり皇后に立つが、夭折し、即位はかなわなかった。『栄花物語』における「夢見」は、予兆を感じさせながらも、実現せずに終わるものであるらしい。

(18) 『栄花物語研究』「栄花物語・大鏡に見える中の関白家」(桜楓社　昭和48年5月)

(19) ただし、藤原行成の『権記』上の寛仁元年八月六日の条に、

六日、辛未、右近府生公忠参来申云、大殿可参皇(太)后宮給、是依東宮事云々、未刻許良経来自殿云、人々被候、其気色等依儲君事歟、殿下被問在家歟、其気色若可被参歟云々、即先参式部卿宮、次参殿、二位中将云、依皇(太)后宮御消息殿下被参云々、参御前、命云、明日可来、即被参皇(太)后宮、帰京便参李部宮、謁源相公、(大日本史料所引『立坊部類記』)

とある。敦明親王の東宮退位に関わって、傍線のように、敦康親王の別当であった行成はまず親王邸に参上し、次に道長の許に参上している。また敦康親王の許にもどっている。この時は、弟敦成親王が立太子したのだが、そういう折に敦康親王が無視できない立場にあったことは確実である。

(20) 敦康親王の「宿世」は、帝位につけないというものである。他の人には一、二例しか使用しないが、我身を「宿世」という言葉を用いて述懐している例が多い。ただし、彰子発言中の敦成・敦良親王それぞれに関わる「宿世」はいずれ必ず帝位につくもの、として位置づけられている点には注目したい。なお、栄花物語で、「御後見」(「後見」を含む)という語が多く用いられているのも、敦康親王が七例と突出し、それは立太子問題に関わるものがほとんどで、敦康立太子に対する異常な関心がうかがえる。